

額に對して禄田が給せられたものもあるが、禄米の幾分かにしか下賜されないものもあつたこと、などの諸特徴を挙げて、禄田を食禄に對して当然給与される職田とは看做し難いことを述べられる(一七七—一九三頁)。そしてこの事実、つまり禄田には賜給・不賜給があり、禄米に對する禄田の賜給の割合に差異がみられるのは、「太祖の列侯その人に對する恩寵如何に係つてゐるのである。太祖はこれによつて列侯の功を賞し」たのであり(一九四頁)、ここに禄田が既に「莊田の性質を帯びてゐたのである」(一七七頁)といわれ、禄田に莊田の性格を認める理由を明示されたわけである。

以上は、禄田關係の數篇の論文について、禄田政策の中止をめぐる議論と、禄田の性格に關する議論を便宜的な材料として、博士の研究の發展の一端を示したものである。この他に、屯田・投獻・詭寄・丈量・田土統計などについても同様に研究の深化の過程をたどることができる。個々のテーマに對して、絶えず前進して行く博士の努力と情熱と、その迫力には全く圧倒されてしまう。所で、禄田を通じてみたように、本書所収の論文相互の間には重複する部分がかなり多いが、この重複部分が前述した博士の努力の追体験の恰好の場にならないのである。本書の編集も、「博士の一つ一つのテーマに關する考察の發展が、如実にうかがえるのではないか」ということを考慮して論文集の形式をとつたのであり(序文三

頁)、それは略々成功しているといえよう。ただ欲をいへば、恐らくスペースの關係で省かれたのであるが、例えば禄田關係からいへば先に参考した「明初ノ土地問題」なども採録されればより興味深いものになつたのではないかと思われる。それはともかくとして、①篇に、「原傑の此の文の写しに皇明經世文編の卷數を書き落してあるので今は明記することが出来ない」(六頁)とあるが、これは卷九十二であること、また「韓諒の伝はありそうなものだが未だ見当らない」(九頁)とあるが、韓諒の伝記は『蘭台法簡錄』卷一に載つてゐることを補足しておきたい。

この拙い一文が、本書を読まれる研究者諸氏に幾らかでも手引きとして参考となれば幸いである。そして、清水博士の明代土地制度史研究の業績に應える具体的な成果の統出することを期待しながら、未熟な紹介の筆を擱くことにするが、なお、西村元照氏による専門家の立場からなされた書評(東洋史研究二八の一)を是非併読していただきたい。

(大安) 昭和四十三年十一月刊 五九二頁)

故宫文献 第一卷第一期・第二期

神田 信夫

故宮博物院が中国文化財の世界的宝庫であることはいまさら説くまでもない。そしてその優品の多くは現在台湾に遷り、

先年台北市の郊外士林外雙溪に新たに建てられた同院で一般に公開されて人気を呼んでいることも周知のところである。

その陳列品には、殷周の銅器をはじめ中国歴代の美術工芸品とともに宋元版の稀觀書や清代の檔案の類がある。故宮博物院には、そうした貴重な図書や檔案も多数収蔵されているのである。

故宮の檔案とは、清代の軍機処や内閣大庫、或いは宮中や内務府などに存したもので、戦前すでに或る程度の整理が行われて、相当量のものが活字にして公刊された。すなわち『掌故叢編』『文獻叢編』『史料旬刊』などが檔案の整理されるに随つてそれを収録して定期的に刊行されたほか、『清三藩史料』や『清代文字獄檔冊』など或る事件の檔案をまとめたものも出版された。しかし一九三三年時局の緊迫に伴い、故宮の文物がベキンからいわゆる南遷して以後、戦争の拡大とともに檔案の刊行も無論中断されてしまった。戦後台湾に遷つた故宮博物院の文物の中には檔案の類も含まれていた。案も展観されていたが、先年台北に移つて以来、檔案の整理は着々と進んできたようである。

がんらい故宮博物院には、美術工芸品の古物館、書籍の図書館、檔案などの文獻館の三部門があつた。現在台湾の同院の書画組組長那志良氏の著書『故宮博物院三十年之経過』お

よび『故宮四十年』によると、初め南遷した時、文獻館の木箱は三千七百七十三個あつたが、その後、戦争中各地を転々として、戦後台湾に運ばれたのは僅かに二百四箱であるという。その内訳は、宮中檔三十一箱、軍機処檔四十七箱、実録二箱、清史館檔六十二箱、起居注五十箱、國書一箱、詔書一箱、雜檔二箱、本紀八箱である。実録や起居注なども含まれてはいるが、檔案の類が文獻館の箱の三分の二以上を占めているわけである。もとより南遷当時の三千七百余箱に比べれば余りにも少いとはいへ、木箱は相当な大きさであるから、現存のものだけでも実に歴大な量といわねばならない。清代史の資料としては、実録をはじめ既刊のものでも汗牛充棟ただならぬものがあるが、やはり檔案が第一等の史料的价值を有することは言うまでもない。この度、この貴重な故宮の檔案が、院長蔣復璁博士の唱道により『故宮文獻』と題して再び刊行されるに至つたことは、学界のためまことに慶賀に堪えないところである。

さて『故宮文獻』は昨一九六九年十二月に第一巻第一期が創刊され、ついで本年三月第二期が続刊された。毎年三月、六月、九月、十二月発行のクォーターリーで、随時増刊専号も出すという意気込みである。編輯は、滿洲史・清朝史の専門家の国立台湾大学教授陳捷先氏を主編として七人の委員が構成する編輯委員会が當つている。本書はB5版のサイズで、既

冊の二冊とも二百余頁から成るが、ともに初めの約四分の一の頁数は「論著」と題して學術論文が掲載されている。すなわち第一期には方濬武氏の「清初通曉滿蒙語文及會出関之西洋教士」、何佑森氏の「龔定菴的思想」、杜維運氏の「李保泰の生平与學術」、陳捷先氏の「後金領旗貝勒考略」の四論文、第二期には同じく陳氏の「多爾袞稱皇父攝政王研究」、王德毅氏の「顧祖禹年譜上」、陳万鼎氏の「論孔尚任因事罷官疑案」、莊吉發氏の「從故宮博物院現藏宮中檔案談清代的奏摺」の四論文である。「論著」として掲載するものは、清代の民族、歴史、言語、思想、宗教、芸術、礼俗等に関する學術論文であるという。

残余の約四分の三の頁は「文獻」と題して故宮所蔵の清代の檔案の収録にあてられている。戦前の『文獻叢編』などはすべて鉛印に附されていたが、今回はすべて影印とし、硃批や朱印は特に朱色で印刷するという念の入れかたである。従つて一頁に入る字数は鉛印に比してはるかに少いけれども、謄写などの多い檔案の原形がそのまま知られて頗る便利である。そして第二期には、奏摺のサンプルとして、光緒二十二年七月六日附の甘肅新疆巡撫饒應祺の奏摺が封筒まで原物のままの体裁で複製して附録されている。

「文獻」として今回影印されたのは宮中檔案である。故宮に現存するその檔案の数は十万余件に達するそうで、朝代の

順によつて載録していくとのことであるが、第一、二期ともに康熙朝のものが収められている。第一期には康熙十七年三月十六日附の上諭一件と無年月の密諭一件のほか百七十六件の硃批奏摺、第二期には百三件の硃批奏摺が収録されている。奏摺はすべて上奏者ごとにとまとめてその筆劃順によつて排列し、最初に目次を附して各人の略歴と各奏摺の年月日と題目を記すなど用意周到である。第一期には王昭度以下十五人、第二期には王文雄以下九人の奏摺が収められ、その年代は無年月のものを別として、康熙四十年代と五十年代、ことに五十年代のものが多し。故宮に蔵するそれら各人の奏摺でも単に請安(天機奉伺)に過ぎないものはすべて省かれている。一体、上奏文でも摺本は題本と異り往々機密に触れるものがあるが、第一期所載の王鴻緒の奏摺には密奏というものが多く、硃批の文にも「無一人知道」などと書かれたものが特に滿洲文字で *seita* (知つた) と書かれた例などがあつて甚だ興味深い。また第一期に一番最初に載録されている康熙十七年三月十六日附の広西巡撫傅弘烈に下した上諭も、『実録』はもとより『平定三逆方略』などにも見えないもので、末尾に特に硃筆で「此諭不可叫人知、若有人知、爾必有禍也、不必回奏」「密諭不可一人知道」などと書かれているのも面白い。これら宮中檔案の實際の活用は今後の研究に俟た

ねばならないが、その史料の価値は極めて大きいのである。

ところで第一期では、もともと原本の文字の細小なものも縮印して一頁に二段或いは三段と組入れたので、余りにも字が小さくて実用に適さない憾みのあるのを残念に思つていた。しかし第二期では細字のものは一段とするように改められてゐるのを見て安堵した。経費の上からは問題もあろうが、折角の影印であるから、今後とも出来るだけ実用に適するように願いたいものである。

ともあれあの厩然山をなす檔案を整理するというのは容易の業ではない。種々の困難な状況の下にあつて長年整理を続けてこられた故宮の方々の労苦を多とするとともに、今回『故宮文獻』の編輯刊行を推進された陳捷先氏はじめ諸氏に心から敬意を表したい。それにつけても痛感されるのは、折角統々と公刊されるようになった檔案が史料として真に研究に活用されることである。それとともに檔案の古文書学的な研究も進められねばなるまい。先年中央研究院歴史語言研究所から李光濤氏の編輯に係る『明清檔案存真選輯初集』が刊行され、檔案の写真版が学界に供されたが、今回さらに多くの檔案が影印されることになつたのである。戦前故宮で檔案の整理が或る程度軌道に乗つた時、単士魁氏らによつてその古文書学的研究が行われた。その後中断していたところ、最近になつて陳捷先氏の“Missives to the Emperors”と題

する英文の論文が発表され、また新刊の『故宮文獻』の第二期には前記の如き莊吉堯氏の研究も出てゐるが、さらに進められるべきであらう。

なお故宮博物院においては、昨年はいわゆる『滿文原檔』を『旧滿洲檔』と題して影印し、本年は『道咸同光四朝奏議』を出版するなど、清代の文獻の公刊に尽力されていて、研究者にとつて甚だ有難い次第であるが、『故宮文獻』も今後ますます充実して定期的に刊行が続けられていくのを切に望んでやまない。

(第一期 一九六九年十二月二〇九頁、第二期 一九七〇年三月二二八頁、国立故宮博物院刊)

K・ヴァーツヤヤーヤン著

文学及び芸術における古典インド

舞踊

田中於菟弥

美しいインドの古典舞踊を見るものは、誰しもそれが長い伝統に培われてきたことを感受するであらうが、その伝統を起源に溯つて研究することは極めて困難で、鬼角演技者は技能にはしり、研究者は理論のみに頼る傾向がある。著者は自ら多年に亘り舞踊の実技を習得した結果、その真技を會得するためには、インド美学の本質とこれに由来する舞踊の原理